
おにいちゃんなネギと、転生者でおとうとなボク

uyr yama

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おにいちちゃんなネギと、転生者でおとうとなボク

【Nコード】

N28690

【作者名】

u y r y a m a

【あらすじ】

ブラコン無敵お兄ちゃんなネギと、転生者だけどチート能力一切なしの弟くん。

大切な弟を守る為なら、神をも殺す、公式チートなネギの活躍を、頭抱えて見守る弟を描いたハートフル(?) コメディー。

某理想郷にて、『どうしてこうなった……!?!?』のタイトルで投下させて頂いていた作品です。

アチラを消し、コチラに移るさい、同名タイトルがありましたので変更しました。

全7話の中編です。

いちわめ

「はあ、はあ、はあ……あと、少しだよ、マギ」

全身を化け物の血で赤黒く染める幼児。

その幼児の背中には、足をちょびつとすりむいてる、同じ顔の幼児。

もしもこの場にナギ・スプリングフィールドを知っている者が居れば、この少年達を見てこう思ったろう。

血は水よりも濃し、ぶっちゃけ超そっくりだと。

特に兄のネギは、弟のマギを背負ってひた走っていた。

とても幼児とは思えない力と脚力で、炎に彩られている村を駆け抜けていたのだ。

まさにナギの息子ならではのと言った所だろう。

そんなネギが必死に駆ける村からは、僅かな怒号と沢山の悲鳴、何より耳を塞ぎたくなるような断末魔の叫び。

ネギは唇をキツク噛みしめ、それらの叫びを聞こえてない風を装う。今のネギには力がなかった。

それもその筈、ようやく3才になったばかりのネギに、この状況をどうにか出来る筈などないのだ。

背負う弟を守りきれるかどうかさえ怪しいというのに、他人、しかも大人達の身を案じる余裕などあるはずもない。

とは言っても、普通の3歳児ならば、ただ泣き叫ぶだけしか出来ないはず。

なのにネギは弟、しかも殆ど体格も能力の違いも無いはずの双子の弟を背負い、必死に頭を回転させていた。

どうすれば良いのか、どうすれば助かるのか、そもそも、どうしてこんな事になったのか……？

「もう、いいよ、お兄ちゃん。僕をおいて逃げて……」

黙り込んで考えていたネギに、不安そうに、でも決意のこもった響きでマギはネギにそう言った。

マギは思ったのだ。

自分という足手まといが居なければ、兄はこの地獄から脱出するなぞ容易いことだろう。

なにせ、自分に襲い掛かってきた化け物を、魔力がこもった拳の一撃で殲滅したのだから。

でも、

「マギのバカっ！ 僕は絶対に見捨てたりなんかしないからな！
だって、僕とマギは、たった2人きりの家族じゃないか……」

ネギだって強くなんかはない。

化け物を殺したのだって、無我夢中でどうやったのかのかなんて分からない。

もう一度やれ！ って言われても、間違いないだろう。

何より、ネギがさっき言った通り、ネギにとってマギはたった一人の家族。

親はいない。親戚はあれど、何故か自分と弟は2人切りの空間での生活を余儀なくされて。

大人に甘えたい。でも、大人は2人の幼い兄弟が本当に欲しかった愛情を与えることは無かった。

父を英雄だと褒め称える一方で、決して、決して……

だからネギは思うのだ。

もしも弟が居なければ、自分は寂しくて死んでしまう。

この、魔力の欠片も持たないで産まれてきた弟の存在が無ければ。

父が英雄？ だからどうした！

それよか母は一体ダレなんだよ！

誰か教えろよ、この糞呆け共が！！

最初の方で言ったように、血は水よりも濃かった。

本当だったら母親似の、真面目でイギリス紳士（笑）に育つ筈だっ

たのだが……

「ごめん……お兄ちゃん……」

「分かったんないよ。ごめんね、キツイ言い方しちゃってさ」

その時、マギがチラリと見たネギの横顔はとても凛々しく、誇りに
充ち満ちていた。

汗と血に濡れ、それでも輝きを失わない瞳に、マギは憧れと尊敬の
念を強くする。

英雄と呼ばれる父でなく、双子の兄であるネギを。

「だったんだけどなー」

頬を引き攣らせ、マギはボソリと呟いた。

所謂、現実逃避をしていたのだ。

目の前の光景が、あまりにもあんまりだったんで。

「ふははははーっ！ 父さん如きに封印されて、しかもまだその封印が解けてないなんちゃって幼女如きに、この僕が倒せるとでも思っていたのかい？」

「むぎぎぎぎぎ……っ！！」

幼女を踏みつけて勝ち誇る少年ネギ。

幼女、エヴァンジェリン・A・K・マグダウエルは、マギが知る原作知識によれば、闇の福音などと呼ばれ恐れられている化け物だったはず。

それを、例え封印されて本来の力が出せないとはいえ、あっさりと返り討ちにするこの兄貴。

近くには四肢を魔法で吹き飛ばされて、ダルマのようになってしまった茶々丸まで……

マギはあの6年前の悲劇の日の最後、父ナギ・スプリングフィールド

ドの超絶魔法を見た瞬間、前世の記憶を取り戻した。
とは言っても、あくまでも主格は今世の自分であり、前世の記憶は記録みたいなものだったけど。

ただ、その前世の記憶の中には、この世界の出来事が漫画になっている記憶があつて、でもそんなの全く関係ねー。

だって、前世の記憶にある『魔法先生ネギま!』の主人公であるネギは、少なくともこんな傍若無人ではなかった。

ネギはあの日、自分達を助けるために現れたナギを、

「遅い！ それでも父親なんですか！」

と言いながらぶん殴ったのを皮切りに、弟であるマギを守り育てる為なら何でもするブラコンになってしまったのだ。

今、目の前で悔しそうにするエヴァンジェリンも、マギを襲ってこんなになった。

マギは前世の記憶を取り戻してからも、ネギを変わず尊敬しているが、前世の記憶が持っているが故に、こう思ってしまう。

「どうしてこうなった……」

この学園都市の小等部に通うマギは、中等部で教師をやって自分を養う兄の姿に冷や汗を流す毎日である。

あきらかに原作から剥離してるよね!?

どこか遠い目のマギの耳に、

「この低能！血吸い蟲の分際でマジに手を出すなんて死ぬの？バカなの？ハゲなの？だいたいさ、僕に勝てる訳ないのに何偉そうにふんぞり返ってたの？」

呆れるよね、もう死んでよ、ホントさー。600歳だかなんだか知らんけど、それだけ生きたらもう十分でしょ？ほら、ホラホラホラ……………！！！！」

楽しそうに言葉攻めするネギの終わらない罵倒。

「ほんと、どうしてこうなった……」

マジの2度目の眩きが、むなしく夜の麻帆良に響き、消えた。

にわめ

「ふふふ……フハハハ……ようやくだ。ようやくこの日が来たか……ッ！」

金髪に紅眼、何より目を見張るような美少女。

いいや、むしろ美少女？

腰どころか、膝を超える長くサラサラとした髪を煩わしげに払い、怒りが籠った言葉を吐き出す。

目はギラギラと憎しみで血走り、少女の従者である機械で出来た乙女である彼女もまた、その拙い感情を怒りで染めていた。

それもそのはず。

彼女、絡繰茶々丸は、眼前で主であるエヴァンジェリン・A・K・マグダウェルを屈辱的に踏みつけられ、自身の四肢をも魔法で破壊

されたのだから。

『不死の魔法使い』『闇の福音』『人形使い』などの二つ名持ちの元賞金首であるエヴァンジェリン。

学園都市全体のメンテナンスがある今日、彼女の絶大なる力を封じ込めている結界をこの機に乗じて一時的に無効化し、復讐の狼煙をあげるのだ。

「あのクソガキの驚く顔が目には浮かぶわ……クククク……ハハハハハ……アーハッハッハッハッハッハッハッ——」

実に禍々しく嗤う。

こんな彼女を見れば、魔法世界でナマハゲ扱いされているのも分かると言うものだ。

なんせ『女子供は殺らない』などと言った悪としての誇りを、今宵彼女は鼻歌混じりで破る気まんまんである。

ソレ程の屈辱、ソレ程の憎悪……！

本来優しい性格の茶々丸でさえ、無言でその行為を肯定しているのだから、彼女達の怒りの程が知れよう。

「待っている！ ネギ・スプリングフィールド！！ 驕り昂ぶった貴様など、今夜の作戦で満月を待たずにケチヨンケチヨンだ！！」

「ハイ、ケチヨンケチヨンです」

「そうしてキサマの目の前で、キサマの大事な弟の体液を思う存分啜り、我が下僕としてくれるわっ！」

「私の後輩として未来永劫可愛がってあげましょう」

「そうだ！ 下僕だ！！ その上で絶望したキサマの血という血を一滴残らず吸い尽くしてやるっ！！」

「ええ、絶望したネギ先生の目の前で、マギ・スプリングフィールドを愛で尽くしてあげます。具体的には、私のネジを巻かせながら性的なご奉仕などさせてみてはどうでしょうか……？」

「……茶々丸？」

「ネギ先生にボコられた私を、優しく介抱してくれたあの子……、今の私なら、雪広あやかさんのいい友達になれる自信があります」

「お、おい、ちょっと待て茶々丸！」

「ご安心下さい、マスター。まずはマスターの足元にひれ伏させ、御身足に忠誠のキスをする所から始めさせますから」

「いや、だからな……？」

「ですが勘違いしてはいけません。私直々の調教が完了するまでは貸しませんよ？ あの子の初めては私のモノです！」

「……超め、修理をミスったか？」

「ああ、そうですね。雪広あやか様に弟子入りして、幼子の愛で方を学んできた方が良いでしょうか？　そうした方が、効率的に調教が出来ます」

そう言うと、呆然と茶々丸を見るエヴァンジェリンをおいて、そそくさと彼女の目の前から居なくなった。

言葉通り、雪広あやかの下へと行ったのだろう。

エヴァンジェリンは、数回、ピクッピクッと頬を引き攣らせ、ボソリと呟いた。

「どうしてこうなった……」

彼女の虚しい呟きは、誰に聞かれるでもなく、部屋に吸い込まれた。

某県にある大型テーマパーク。

そこに件のネギ・スプリングフィールドとマギ・スプリングフィールドが居た。

学園都市全体のメンテナンスがある今日と明日の2日間、ネギの教師としての仕事はお休みである。

そして同僚であるガンドルフィーニ一家と式集院一家のご好意により、ここに連れて来て貰ったのだ。

「わーっ、すごいや！」

「う、うん！　凄いな、兄さん！」

2人の幼い兄弟は、目をキラキラさせる。

なんせ日本に来るまではウェールズの片田舎でひっそりと暮らしていて、こんな大型アミューズメントパークになんて来たことがなかったのだ。

前世の記憶持ちであるマギは、それこそ前世では行った事があった。でも、それはあくまで記録的なものであり、やはりこうして来るのは初めてな感覚なのだ。

いつもは兄として気を張ってるネギまで、だたの子供みたいにはしゃいでいる。

「ねぎせんせー。まぎおにーちゃん。わたし、あそこのお城に行きたいなー」

「あー！ 私も行きたーい！」

チラチラとコチラを伺うネギとマギに、ガンドルフィーニと忒集院がウンと大きく頷き、ソレを見た幼い兄弟はそれぞれ自分達の娘と手を繋ぎ、楽しそうにお城へと向う。

そんな幼い兄弟と自分達の娘を見て、ガンドルフィーニと忒集院は柔らかに笑む。

こんな光景を見る為に、今まで頑張ってきたのだと。そしてこれこそが、自分たちが守らねばならない光景なんだと。

2人の笑みはとても誇りに満ちていて、傍らに同じように笑んでいた2人の妻たちが惚れ直すほどだ。

「さあさ、アナタ達はホテルのチェックインを済ませて来てくださいね。私達はあの子達を追いかけますから」

「おいおい、それは酷くないかい？」

「何を言ってるんです？ これこそ休日のパパの役目ですよ」

やれやれ……と、揃って大きくオーバーアクションする2人は、休日のパパの役目を果たすため、肩を並べてホテルへと向って歩き去る。

妻たちは顔を見合わせると、クスリと笑い合った。

そうして女同士で妻同士、楽しく談笑しながら、子供達をゆっくり追いかける。

日本全国どこでも見られるはずの幸せな家族の風景。

でも、ネギとマギにとっては初めての暖かい体験。

こうして2人は、この世界に生まれ落ちて初めてと言っていい程の楽しい休日をごすごすのだった。

そして夜になり……何事もなく朝になった。

カー、カー……

カラスの朝の挨拶が、麻帆良学園都市の空に響く。
空は快晴！ とても清々しい日曜の朝である。

そんな清々しい空の下で、呆然と大口開けている少女が一人。
せっかく解けた封印も、その相手となるネギとマギの兄弟がいなければ意味がない。

そうこうしている内に学園の結界が復活し、真祖の魔法使いからただの幼女へと逆戻り。

呆然としてしまうのも仕方がないかも知れない。

彼女の傍らには、無表情ながら無念さを隠し切れない茶々丸と、身動き一つ取れなくなっているエヴァンジェリンの最初の従者、チャチャゼロが地面に転がっていた。

年に2回のメンテナンス。次のチャンスは半年後……

残念無念、また明日。

エヴァンジェリンは、ただただ呆然。

「どうしてこうなった……」

「……今回はキチンとマギ君の動向を調べてから行動してください」

「ケケケ、役立たズノマスターヲ持ツト苦勞スルナ、妹ヨ」

「ええ、本当に……」

何より、自分の従者達が妙に反抗的になったのはどうしてだ……？

「どうして……こうなったのだ……っ!!」

カァー、カァー、カァー、アホォー……

カラスの鳴き声にムカツときたのか、「なんだとーっ！」と青筋立
てるエヴァンジェリン。

「ああ、カラスの鳴き声に本気で怒る600歳ってどうなんでしょ
うか、姉さん……」

「誇り高キ悪ノ魔法使イモ、今ハ昔ダナ……」

「嫌いぞお前ら！ 黙れ黙れ黙れえーっ！！」

さんわめ

「マギくん、もう起きなアカンよ？」

「まったく、いつまで寝てんのよっ！」

暖かい布団の中、ぬくぬくと眠っていると、身体を揺さぶられ、目を覚ませと急かされる。

今日は午前授業。お昼ごはんを食べた後、小春日和の陽気にあてられ、マギは絶賛お昼寝中。

転生者としての『記録』があるだけの、実は弟LOVEな兄のおかげでちよつと甘えん坊な小学生。

「んみゅ……眠いです……」

しよせん、眠気には勝てやしないのだ。

だから起きない。起きてたまるか！

マギは布団の中に頭まで潜り込むと、身体を丸めて自分を起こそうとする外界の圧力を完全拒否！

ただど敵も然る者。

布団の端をしっかと掴むと、「起きろっつってんでしょーがっ!」
バツと一気にまくりあげた。

強制的に布団の中から叩き出されたマギは、ごろごろろんと転がって、壁にガン! とぶつかった。

目に星がちらつくほど頭を痛打し、マギは涙目で抗議の視線を彼女に送る。

でも彼女はそんな気にもとめずに、マギのパジャマをパツパと脱がす。

パンツとシャツだけになったマギに、今度はズボンをはかせ、上着を着せる。

靴下も一足づつ丁寧に履かせ、最後に手串で髪の毛を整えると、「よし、と! 出かけるわよ」そう言って、マギの手をギュッと握り締めた。

アスナとマギ。

仲の好い姉弟みたいな2人は、木乃香の微笑ましそうな視線にちよっとだけ顔を赤らめる。

マギは誤魔化す様にアスナと手を繋いでいる反対の手を木乃香に伸ばし、木乃香が嬉しそうにマギの手を取のを見ると、ようやく疑問を口にした。

「どこに行くんですか?」

「うん？ 修学旅行の準備よ」

「カバンとか、着替えとか買わなあかんやろ？」

「でも、ボクには関係ありませんよ？」

「アンタを一人で置いてったら、ネギがぶちギレルでしょうが」

ネギの最優先事項は、マギだ。

過保護の中の過保護、キング・オブ・ブラコンマスターである彼のこと。

部屋で一人寂しく寝ているマギを見つけたら、アスナと木乃香に明日はない。

そんな未来を想像してしまったのか、アスナと木乃香は自分で自分を抱き締めて、ブルルと恐怖で身体を震わせた。

「あははははは……」

頬を引き攣らせ、年に似合わない乾いた笑いをするマギに、反論する力はなかった。

どうして兄さんはこうなった！？ なんて軽く現実逃避。

ポツリと「アスナも充分過保護なんやけどな」なんて木乃香の呟きも聞こえない。

聞こえないったら、聞こえないのだ！

……それはともかく、もう修学旅行かく、とマジはアスナ達に手を引かれながら思う。

今度の修学旅行。彼女達の行き先は、ハワイである。

しかもネギは行かずにお留守番。

最初は原作通りに京都に行く予定だったらしいんだけど……

京都？ バカじゃないの？ 一応理事務めてるんだし、関東と関西の関係は分かってるよね？ なのになんでわざわざ危ない橋を渡るの？

特使を派遣して親書を渡して仲良くしましょうって、そんな修学旅行のついででみたいなコトしたら、相手に失礼じゃないの？

それとも何？ 出来レース？ だったらボクを巻き込まないでくれる？ 英雄の息子のネームバリュー使うとかさー、10才のガキを何だと思ってるの？

なによりさ、その10才にもならないボクが、中学生の引率なんて出来るわけねーだろうが！

ほんとさ、フザケテルの？ それとも真正のアホなの？ どっちなの？ その長い頭の中身ってやっぱり空なの？ どうなの？

ねえ、子供の頃のあだ名はなんだった？ 妖怪？ ぬらりひょん？

それともちよっとカッコつけて仙人？ あっは！ そんな大したモンじゃないのにねっ！

こんな感じで、延々と学園長が泣くまで罵声を浴びせ……もといO
HANASHIしたらしい。しかも今日も。

今現在、諦めきれない学園長が、再びネギを呼び出し説得中なのだ。
ネギも援軍としてガンドルフィーニ、式集院の両教諭に、更には関
西に詳しい葛葉刀子まで連れて反論中。

まっとうな教師で立派な魔法使いを目指す者なら、生徒を危険に晒
しはしない。

だからネギは、ここぞとばかりに学園長を精神的に甚振っているの
だろう。

そして、その結果ネギが得られるものは……受け持ちのクラスが修
学旅行に言っている間の自由……！

久しぶりに2人きりで過ごす弟との日々のために、鋭意奮闘中なの
だ！！

……マギもブラコンと言っている程に兄が大好きで尊敬しているが、
そろそろいい加減にして欲しいと、ちょっとだけだだけだと思っていま
う。

もしもそんなこと言ったら、兄さんが 死 ぬ から決して言わな
いけど……

と、そうこう考えてる内に、修学旅行セール中のお店に辿り着き、

「はい、これ着てみなさい」

と、アスナがマギに服を手渡す。
マギがコテンと首を傾げると、

「アンタもネギも着たきりスズメなんだから、普段着はコッチでな
んとかしないとね」

なんてちよつと楽しそう。

見れば木乃香も同意見みたいで、2人してあれこれネギマギの服を
見繕っていた。

マギは「はぁ」と空返事を返しながら、アスナと木乃香のなすがま
まに着せ替え人形。

「うーん、こっちはネギ君むきやな」

「外見一緒だけど雰囲気全然違うから、着せる服考えるのも結構楽
しいわね」

「あつ、でもあんま時間かけるのもなんやし、ネギ君のはウチが見
繕うから、アスナはマギ君の方を頼むな」

「そうね。えっと、マギは可愛い系がいいから……」

「ウチはお腹の中がまっ黒けのネギ君用に、カッコイイ系を探しに……」

マギの分だけじゃなく、サイズが一緒ってことでネギの分まで着せられながら、マギは役に立ったことの無い原作知識を思い出していた。

イベントが起きた様子さえなかった図書館島編。

気づいたら終わってたエヴァンジェリン編。

そして今度の修学旅行編。

なにこれ？ ただの一つさえ原作通りにストーリーが進んでないよね？

……そう言えば、原作だったらここで木乃香の仮契約失敗イベントがあったような……

あれ？ オコジョ妖精のカモ君がいないよね？

会ったことないけど、この世界にもいるのかなあ？

それは5年前のイギリスはウェールズのとある山中での出来事。
一匹のオコジョ妖精が、猟師の仕掛けた罠に引っ掛かっていた。
そこから抜け出そうともがくオコジョは、一人の少年と出会う。
少年の名は、ネギ・スプリングフィールド。

「あつ、獲物みーつけ！」

少年とその弟は、衣食住の全てを両親ではない他人……メルディア
ナ魔法学校の世話になっていた。
出される食事に不満をもったことはないが、それでも健やかな成長
の為に、少しでも多くの肉が欲しい。

具体的に言えば、ネギは弟を守るための修行で使ったエネルギーの
回復や、強靱な肉体を作る為にも、出される食事だけでは足りない
のだ。

もっと簡単に言えば、肉が食いたい！ 肉を食わせろ！ もっと肉
よこせ！ である。

だから山にいくつもの罠を仕掛け、更には猟師が仕掛けた罠を、そ

れを仕掛けた獵師よりも先に回って獲物を回収していた。

「オコジヨは筋張ってて灰汁抜きが面倒なんだけどなー。まあ、お姉ちゃんに任せとけば面倒も何もないんだけどね」

「お、俺っちはおいしくないっすよ！　だから見逃し……」

コキッ、少年は無垢な笑みを浮かべたまま、絶望するオコジヨの首を捻った。

こうして兄弟の食卓に、オコジヨ肉が出される事になったのだ……

「おいしい？」

「うん！　お姉ちゃんの作ってくれる料理はみんなおいしいよ！」

「今日のお肉は、ボクがとってきたんだよ？」

「すっごーい！　さすがはお兄ちゃんだね！」

しばし考え、出た結論。

「うーん、いてもいなくても変わんないかな？」

やたらと強いネギに、素人のアスナや木乃香と仮契約するメリットは殆ど無い。

何より、この世界のネギは魔法バレしていない。だからデメリットしかないのだ。

「なんの話よ？」

「あつ、何でもありません、アスナさん……ってそれ！ スカートじゃないですか！」

「大丈夫だって。似合うわよ、ねえみんな」

アスナの視線の先には、ゴメンなうっと手を合わせて謝る木乃香と、鼻血でも堪えてるのだろうか？

口元を手で押さえてプルプル震えるいいんちよこと雪広あやかと、マギにストーカー的な愛情を寄せる絡繰茶々丸がいた。

木乃香はともかく、後の2人の手には高画質のデジカメ……

はあはあと鼻息荒く、血走った視線が超怖い。

そんな2人はアスナの言葉に激しく同意。

「「はやく！ はやく！！」」と急かしまくる。

「い、いや……」

力なく首を横に振って拒否するマギだが、そうは問屋がよろさない。アスナは出かける前みたいに、慣れた手つきでマギの服を脱がしてく。

「ネギの現在位置！」

「まだ、じいちゃんどこみたいやな」

「でも、あんま時間はないわね。なんせネギときたら……急ぐわよ？」

「了解！」

それにいいんちよと茶々丸が加わり……

「あ、あーっ!？」

にやにやしながら見ている他の学生達の目の前で、マギの断末魔の絶叫が修学旅行セーブルに賑わう学園生協に響き渡った。

「はっ！？ マギが危ない……！！！」

「なんじゃ？ 京都へ行く気になったのかの？」

「うるさいですよ妖怪ジジイ！ 今はそれ所じゃない！」

「……おんしの口の悪さは、父親であるナギ以上じゃない……」

よんわめ 前編

「困るんですよ、超さん。こんなことされちゃあ」

その言葉には偽りなど一切ないのだろう。

ズタボロとなった少女を見下しながら、ネギは恐ろしく冷たい声色でそう言った。

超はその声に恐怖心を呼び起こされながら、視線を少年の足下に移す。

「う、うう……」

ネギの足の下から呻き声が聞こえる。

グリグリ踵の硬い部分で、気絶した色黒の少女を踏みつけてるのだ。彼女は自分の理念に賛同し、仲間となって働いてくれた人だ。

凄腕のスナイパー。この麻帆良において彼女に匹敵しうる存在など、タカミチ・T・高畑と学園長ぐらいははずなのに。

その彼女が、まるで虫けらのように簡単に蹴散らされたのを見た。

切り札であった時間跳躍弾や、自分が持つ航時機^{カシオペア}など、大して意味を成さなかったのだ。

いや、事前に対応策が練られてたと言っても言うべきかなぜ？　と超の頭は疑問符でいっぱいである。

「種明しをしましょうか？　僕の子孫……らしいアナタへ」

にやりと笑う表情は、先ほどまでの冷たいものではなかった。

この場にタカミチがいればこう言っただろう。

笑い方だけは、まるで『彼』、サウザンド・マスターみたいだと。超はその陽性の笑いに、それでも先ほど以上に恐怖しながら、ネギに気づかれぬようにチラリと空を見る。

まだ、まだ大丈夫。強制認識魔法さえ発動すれば、私の勝ちネ。

そう思った次の瞬間、ネギの右手が雷を帯びた。

そして、ズドンッ！！　稲光が放たれる。

無詠唱『雷の暴風』

無詠唱なはずなのに、超が使うどの魔法よりも高威力である。

科学と魔法の混合技術^{ハイブリット}である、呪紋処理までしてる自分よりも！

超は膝をついた。

命を削ってまでした呪紋処理を軽く超えられてしまったことで、心が折れたのだ。

友であり、仲間であった龍宮真名が無残に蹴散らされ、屈辱に這い蹲ろうとも折れなかった心が。

「話は6年前の事件から始まります」

静かな声だった。

今、超にとってもう一人の友人である葉加瀬聡美。

彼女の乗る飛行船を撃墜したとは思えないほどに静かな声。

地上から4000mの彼方に浮かぶ飛行船。

その高さで撃墜されれば、待っているのは 死 だ。

なのに！ この少年はっ！！

でも、超の心は怒りにも沸き立つことはなかった。

この、こみ上げてくる感情は—— 畏怖。

超は惨めに膝をついたまま、穏やかな様子のネギを見つめた。

そんな超の様子に、ようやく気付いたとばかりに手をポンと叩く。

「ん？ ああ、葉加瀬さんのことですか？ 大丈夫ですよ、ほら」

ネギが燃え落ちる飛行船を指差す。

言いなりになるのは嫌だ。

そうチラリと脳裏を掠めたが、すぐさまそれを否定する。

圧倒的な敗北感に、もうネギに逆らおうと言う気が物凄い勢いで萎

んでいるのだ。

折れてしまった心のままに。

だから素直にネギの指す方を見てみた。

自分のせいで死ぬことになる友人のいる方へと。

悔恨の念が胸を焦がす。

自分になど与しなれば、彼女は死なずに済んだというのに。

あたら若い才能を、未来に燦々と輝くはずだった才能を、自分のせいで死なせてしまったのだ。

涙がこぼれる。喉から呻くような声がもれ……だけでも、

超は視線を向けたとたん、涙を勢いぬぐって目を大きく見開いた。

燃え上がる飛行船が七色に輝いて消滅したからだ。

「みなさんに、あらかじめ対処をお願いしてたんですよ」

ガンドルフイーニ、忒集院、瀬流彦……

脅威度が低いと重要視していなかった魔法先生達。

彼らがネギに向かって手を振っている。

ネギもそれに応えて軽く手を振り返すと、「話、戻しますね」とにっこり笑った。

ネギは超の反応を楽しそうに見ながら語りだした。

「6年前、僕達兄弟の住む村は、MM元老院の陰謀と思しき手によって壊滅しました。もしかして、超さんも知ってました？」

なんだ？ なんなのだ！？

『まだ』知るはずのない知識を、どうして持っているんだ！？

驚愕と茫然が入り混じった表情に顔が固定してしまった超を見て、はあっと小さくため息をするネギ。

アナタの役目はこれからなのですよ？と小さく呟き、再び話に戻る。

「まあ、いいです。で、無事に生き残った僕たち兄弟はその後、ウエールズの山奥にある魔法使い達の街に移り住みました。その時、検査を受けたんですよ、心のね……」

「……それが、どうしたネ……？」

話が分からない。訝しむ超に、ネギはやはり気にも止めない。

「検査と言えば聞こえはいいですが、要するに、記憶を覗き見たんですよ。もちろん、プライバシーは最大限考慮したらしいですが、それはともかく、ウエールズの魔法学校の校長、僕たちのおじいちゃんはそのやって僕とマギの記憶を盗み見て、壊滅した村で何が起こったのか調べたんです。

もしもトラウマになるほどの心の傷があるのなら、消してやるための理由づけだったらいいんですけどね」

そこでネギは口を一旦止めた。

意識を取り戻し、こっそり話を聞いてた龍宮の鳩尾を思い切り踏み

つける。

「がはっ!？」

彼女が再び意識が落ちたのを確認すると、

「アナタが知る必要のない知識です。しばらく眠ってろ!」

そう吐き捨て、厳しい視線で超を睨みつける。

そして、言外にこの先を聞くかと問いかけてきた。

聞かない方がいい。

超はなぜかそう思った。

聞けば、今まで自分がしてきたことがバカらしくなってしまふと。
でも、止められない。本質が戦うものではなく、研究者である彼女は、知りたいと思ってしまった。

こうなっては、もう止められない。止まらない。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの襲撃。修学旅行先の京都で、木乃香さんが誘拐されリョウメンスクナ復活。爵位級の魔族による威力偵察」

話が急に跳んだ? 何を言っている?

エヴァンジェリンの襲撃は分かる。

爵位級の襲来も分かる。

でも、修学旅行の行き先は『沖縄』だ。

当初の予定は確かに京都だったけど。

超の知ってる過去の歴史も、それを指していたと思われてはいたけれど。

だけでも行ったのは、確かに沖縄だった。

「マギの、本国の魔法使い達から無能と蔑まされてたあの子の記憶に、この世界の……違うか……『僕』の行く末にまつわる『記録』があったんですよ。」

あの子が、僕の大切な弟が、マギ・スプリングフィールドが『いない』僕の物語が……！」

ネギはこの話を魔法学校を卒業した時に聞かされた。

最初は胡散臭い話、ついにボケたかクソじじいと思ったものだ。

だからネギは、罪悪感に苛まれつつも、自分でマギの記憶を覗いてみた。

……マギの記録の中にいる自分の甘えたバカっぷりに鳥肌が立った。

だけでも同時に納得もした。

マギがいない自分なんて、こんなものだろうと。

だからその記録に納得するとともに、その記録の正確さを図るための行動をおこした。

麻帆良に来るなり、自分が受け持つ生徒の名前と記録の名前の一致を確認。

続いて宮崎のどかの行動を最初の試金石とした。

放っておけば、彼女は沢山の本を抱えたまま、階段でバランスを崩して落ちてしまう。

そうなるのかどうか様子を見、直前で話しかけて事故を防いだ。

次に高校生とのトラブル。そして自分の本採用試験。

記録の中で、自分に好意を持っていたと思われる人物へのアピール。

こうやって小さな検証を大量に行い、記録の正確さを知ると同時に、自分達の有利な方向へ世界が進むように誘導した。

……あの血吸い虫がボクじゃなくてマジを襲ったのは想定外だったけど。

ポケロボがマジに手を出し始めるのも想定外だったけど!!

「……なら知ってるんだロ? この先の未来を! だったらなんで私に協力しないネ!」

「黙れ! 君はなにをしようとしていたのか分かってんの?」

「なにして、魔法を世界にバラすことで、魔法世界が崩壊した後の……」

「もう一度います。黙れ! そんなんでもいいんだよ! もしもこの地で魔法バレが大々的に行われたらどうなるってんの? 僕を始めとする魔法関係者は軒並み本国送り、そしてオコジョにされちゃうんだよ! そうなったらマジと一緒にいられないじゃないかっ! アイツは魔法使えないせいで本国には入れないんだよ! 分かれよ! ばっかじゃねーの!! もう死ねよ! 魔法世界

がどうとかなんてどうでもいいんだって分かれつつってんだよ!」

地面をダンダンと蹴り、おもつくそ頭を掻き耄りながらそう言うネギを見て超は思った。

ダメだこいつ、なんでこうなった!?

さっきまでの真面目で秘密めいた会話はなんだったんだ!?

「ああ、もういいです。アンタがバカだって良く分かりましたから。大体ちよつと頭がいいからって、君みたいなガキが世界の救済なんて出来るわきゃねーだろうが! 大人がなんのためにいると思ってるの? 君の持つデータさえあれば、この先に必ず起こるだろう魔法世界の崩壊だってなんとかできるかもしれないのにさ! それとも何かい? 自分の様な天才に思いつかないんだから、他の人間が考えても無駄だってかい?ほんと、君の親の顔が見てみたいよ。どんだけ思いこみが激しい中二だよ! あっ、中三か。ぷっ、笑っちゃうよね、あははははははははははははははは。ところで、実体化モジュールって知ってる?」

あまりに酷いマシンガンなトークに、超は力なく首をふった。

もちろん、ネギが何を言ったのか分かってない。

だがネギは、その超を見て、知らないの、ホントそんなに天才名のんなよ。とせせら笑う。

「この技術を提供してもらい、超さんの知る歴史では消滅しただろ

う人達を早急に実体化します。そして、ダライオマ球を始めとする特殊空間を新たに構築し……」

それで本当にどうにか出来るかなんて、ネギは知らない。
ここから先は大人達の仕事だからだ。

ただネギが提示するのは、目の前の少女の記憶と記録。
そうして現在行われてるだろう魔法世界崩壊を防ごうとする技術を後押しし、もしくは廃止させながら、最短で10年と言われる崩壊を何とかすればいい。

そのために、アスナを徹底的に魔法に近づけなかったし、フェイト一味と出くわす可能性のある京都にも行かせなかった。
マギの記憶によると、崩壊を速めるのは彼女の存在が関係各所に盛大にバレタせいっぱいから。

ほんと、あの頭長いのとタカミチ、ろくなことしねー。

さっきも言ったが、ネギにとって魔法世界がどうだろうと本当は関係はないのだ。

第一、弟の存在を無視するゲスな奴らに、なんで自分がなんとかしなきゃならんのかと。

でも、ネギの優しい弟は気にするだろうと、初めてその記録に触れた時にそう思った。

思ってしまった！

だったら、もうネギとしては動くしかないではないか……

この記録を知る自分と、姉であるネカネ、そして祖父の3人で、魔法世界救済のために。

仲間を集め、沢山の人達の協力を得て、そして……

「夕映さん、のどかさん。ここからが本番です。いいですね？」

「あっ、はい、がんばるですよっ！」 「うんー、まずは、超さんの記憶を調べればいいんだよねー」

宮崎のどか、綾瀬夕映。彼女達の心は記録の検証時に自分になびかせた。

彼女達の望む物を提供し、彼女達の望む自分であり続け、そして彼女達を僕の従者にする。

世界図絵といどのえにつき。これ以上有用なアーティファクトは中々ないから。

愛しい僕の従者よ。君たちの有用なアーティファクトは、十全に使わせてもらいますよ。

そして、アナタもね、超さん。

君の無駄に優秀な頭脳も、これからは僕の為に使ってもらおう。

全ては、マギにとって優しい世界を創生するためにっ！！

「ああ、マギマギマギマギマギ……僕の、僕だけの……家族……マギ、マギ……マギマギマギマギマギイイイイイイイイイイ」

狂ったように弟の名を連呼するネギと、自分の心を覗き込みながら、微笑ましそうにそんなネギを見つめるのどか。

そして、のどから得られた情報を、世界図絵で検証しながら、やはり頬を赤くしながらネギを見つめる夕映。

夕映さんとのどかさんが可笑しくなったヨ!?

朱に交われば赤くなる。そんな言葉を思い出しながら、超は最後にこう叫んだ。

「どうしてこうなったネ!？」

彼女の心からの叫びは、この場にいる誰の心に響くことなく、虚しく消え去った。

よんわめ 後編

ズドンッ！！

まばゆい稲光が、地上から天空高く向けて放たれる。

まるでレーザーみたいなソレは、麻帆良学園の上空4000mの高さで悠然と浮かぶ飛行船を貫いた。

一瞬の間を置き炎上、爆発した飛行船は、地上から固唾を飲んで見守っていた人たちの悲鳴のなか、ゆっくりと地上へと墜落していく。その凄惨たる光景に、怯え、恐怖し、逃げ惑う麻帆良学園生徒達。だが、その喧々囂々たる悲鳴が歓声に変わった。

炎上・爆発していた飛行船が、パァーと光り輝いて虹色の光線を周囲に放ち消え去ったからだ。

ここに来て観客となっていた生徒達は思った。

演出だったのか！ スゲー！ CGかよっ！？ 等々……

そして、女子寮の屋上からその光景を見ていたマギも、感嘆の声を上げた。

「すごいすごいっ！ すごいですよアスナさんっ！！」

だけでも、声を掛けられたアスナは、わざわざ屋上まで持ってきて

たデッキチェアの上で、酷く億劫そうにチラリとその方向を見、

「あーん？ あー……」

すぐに興味を失って、再び両腕で目元を隠しながら突っ伏した。アスナのあまりの気のなさに、マギは疲れたように首をゆっくり左右にふった。

なにも、こんなトコで原作まんまじゃなくてもいいのにと……

「……ごめん、マギ。あとちょっとだけでいいからさ、もう少しこうさせて……」

「いいんですよ、アスナさん。学園祭は今年だけじゃありません。来年の学園祭はアスナさんのおごりであちこち回りましょうね？」

「私のおごりいー！？」

「そりゃそうですよ。ぼく、こんな大きなお祭り初めてだったんですよ？ それなのに……」

「わかったわよっ！ 来年ね、ら・い・ね・んっ！」

べーって舌出していじけるアスナを見て、マギはホッと胸を撫で下ろす。

この調子なら、アスナの精神的な復活まで、本当にあと少しだろうなって。

学園祭、最大最後のイベントを終え、空にいっぱいの花火があがる中でマギはそう思った。

それにしても、今までのイベントの無さから一転、学園祭は原作イベントが起きたみたいだ。

アスナの失恋、そして、超の決起(?)。

武道会はなかった。他の色々なイベントと同じく。

なんのトラブルも発生しなかった修学旅行。

その間、兄さんと2人で過ごした平穏な日常……かと思いきや、エヴァンジェリン主従の襲来。

とは言っても、ひたすらエヴァンジェリンの愚痴を聞かされただけだったけれど。

そして修学旅行が終わり、元気一杯で帰ってきた3-Aの生徒達。

この後、【ネギま!】なら来るだろう小太郎は麻帆良に來ない。

それでもなんでか来た魔族ヘルマンは、麻帆良侵入と同時に兄さんに捕縛された。

今頃、彼がどうなってるのかは分からない。

ただ兄さんは言った。数ヵ月後には、村のみんなを石化の呪いから解放出来るかもしれないと。

そう僕に告げると、イギリスで占い師をしているアーニャに連絡を取っていた。

彼女も嬉しいだろうな。

キシリと僅かに軋んだ胸の痛みを振り払い、僕はそう思った。

ウェールズに居たころ、僕と兄さんは良く彼女の世話になったもんだ。

彼女も両親があんなことになっているというのに、それでも僕達に笑顔を見せてくれた。

そんな彼女の事が、僕はちょっとだけ好きだったんだ。

もちろん、彼女が兄さんのことを好きなのは知ってるから、すぐにその想いを振り払いはしたけれど……

まあ、もうその話は終わりにして。

学園祭の準備祭が始まるまでは、僕にとっては本当に、本当に、平穏な日々だった。

ただ原作どおりで前述したとおり、アスナがタカミチにフラレはしたが。

「のどかわいた。ジュースう……」

「はいはい」

甘えた声でそういうアスナに、どっちが年上なんだか。

そう笑いながら、マギは前もって用意しておいて貰っていたクーラーボックスからジュースを取り出し、アスナに手渡す。

さっきまでのこの世の終わりを垣間見たような顔でなく、えへへと笑いながら受け取るアスナ。

空には飛行船爆散イベントに続いて、ドーン！ドーン！と沢山の花火が上がってる。

そんな暗闇の空を彩る花火を眺め、ちゅーちゅージュースを飲むアスナを思うのだ。

神楽坂明日菜はネギま!のメインヒロイン。

もしかしたらこの世界でも兄さんと結ばれる可能性は高い。そうなれば、彼女は未来の義姉である。

仲良くするにこしたことはない。

もつとも、原作でネギとアスナが結ばれたかどうかなんて、マジは知らないし、現状その可能性はとても低いと思ってたけど。

なんせアスナは、ここまできてもまだ、魔法を知らない。

記憶も当然封じられたまま。

ネギとよくケンカはしてるけど、そういう感じは今のところは一切感じられないのだ。

むしろ原作でもネギにポしてた、宮崎のどかと綾瀬夕映、それにアーニャの方が結ばれる可能性が高い。

僕自身はアーニャを応援してるしね。

「ねえ、マジは好きな人、いるの?」

「……いませんよ、今は」

「今だって、いたんだ」

「まあ、好きだった子が、他の人を好きだったただけです」

「その他の人って、ネギ?」

「……さあ?」

「……ごめん、いやなこと聞いちゃって」

「いいんですよ、別に」

2人の間に落ちる、気まずい沈黙。

ただ、遠く聞こえてくる花火の音と、お祭り騒ぎしてる生徒達の楽しそうな歓声のおかげで、まだなんとか場を保ってる。

アスナはタカミチにフラレ、マギはアーニヤにフラれる以前に失恋した。

ただ、それだけのことなのに……

「夏休みさ、アンタたちのお姉ちゃんが遊びに来るんだっけ？」

「ええ、そうですよ。それと、大事な幼馴染みもです」

「そっかあ」

たぶん、これだけで幼馴染みは何だったのか分かったのだろう。

またも苦い顔で沈黙させてしまった。

本当になんだろう？ この安っぽい恋愛ドラマみたいなりとり。

ぶっちゃけた話、アスナさんみたいにショックでも何でもなかったんだけど……

まあ、いいや。

この空気、キチンと終わらせないとね。

マギはアスナの手を取ると、戸惑う彼女を強引に立たせ、屋上から寮内へと続く扉へと誘った。

「ちょっと！　どこ行くつもりよ！」

「みんなの所ですよ。ほら、もう後夜祭が始まってる！」

ぐいぐい手を引っ張るマギに、アスナはツンと唇を尖らせて、

「仕方ないわね……」

そう言いながら、ギュッとマギの手を握り替えた。

そこからは一気だ。

寮の外に出ると、今度は逆にアスナがマギを引っ張るようにして、最も騒がしい場所の中心を目指してひた走った。

きっと、そこにいるから。

自分の、自分達の大切な友人たちが。

アスナは自然と顔がほころぶ自分に気づいてた。

さっきまでは、この世の終わりかと思うぐらいだったのに。

なのに今は、とても楽しいと思う自分がいる。

こう思えるのも、きっとこの子のおかげよね。

「あんがとね、マギ……」

ポツリと小さく呟かれた言葉は、だけでも必死にアスナについてこうしてるマギの耳には届かなかった。

でも、何事か言われたのは気づいてたのだろう。

「えっ？なんて言ったんですかっ」

「なんでもないわよ、バカっ」

照れ隠しで悪態付ながら、視線はずっと前を見る。

ポツリと、「うー、ほっぺが熱いよお」などと小さく口からこぼれたけれど、アスナにとって幸運だったのか、マギの耳には届かなかった。

フレラたばかりだというのに、こんなに簡単に胸をトキメかせていもんじゃないのだと、アスナは自らを自省するかのように、足を動かす速度を速めた。

「うわっ！？ 速すぎですよアスナさんっ！」

「速く行かなきゃ後夜祭終わっちゃうじゃないのよ！！！」

でも、アスナは思うのだ。

このタチの悪い兄を持つ、それでもその兄が大好きなブラコン。次に誰かに恋するまでは、コイツの面倒をみてるのも悪くはない。

遠く視線の先にいる、木乃香に大きく手をふって元気が戻ったことを伝えながら、アスナはもう一度マギの手を強く握りしめた。このあとすぐに、このことを後悔することになるのだけど。

だって、もの凄い怖い顔でアスナを睨む鬼いちゃん……もとい、お兄ちゃんなネギがいたからだ。

「ああ、アスナさん。僕がいない間に、僕の可愛い弟に手を出すなんて……命、いらないんですね？」

「ち、違うわよっ！ そんなんじゃないってばあっ!？」

「アハハハハ！ なに逃げてるんですか？ なにかやましい事でもあるんですか？」

「な、なによ！ こっちくんなバカっ!」

「マギが欲しけりや僕を倒せ！ 倒せないなら死ぬがいいさ！ いいや、むしろ死ぬっ!!！ すぐ死ぬ！ 今すぐなあっ!!！」

「わきゃーッ！ どうしてこうなったのよーっ!？」

失恋の痛みが消えたわけじゃない。それでも、もういちど、ありがとう。

そう、キチンと、いつかアナタに伝えよう。

この先の未来は、マギの知らない未来。

元々大してあてにしてなかった原作知識が、完全に無意味なものになってしまう。

だって、ネギは魔法世界には行かないで、ずっと日本にいるつもりなんだから。

その傍らには、びくびくしてる超と、そうして従者のように佇むのどかと夕映。

それに夏休みから合流したアーニヤまでもがいて、本当にネギま！と違う世界。

だけでも、マギは不安に思うことは一切なかった。

だって、お兄ちゃんは無敵だから。

「ねえマギ、父さんに会いたって思うかい？」

ここでウンと答えれば、兄はきっと父を捜して連れてくるだろう。

それでもマギは首を横に振るのだ。

決して父に会いたくないわけではないけれど。

それでも、自分にとって一番大切なのは、兄なのだから。

兄さんも、僕が一番大切だって思ってくれてたらしいのにな。

マギは心からそう思った。

もっとも、誰の目から見ても、その思いはとっくの間にかなってるんだけど。

これより3年後の話。

マギが唯一気にしてた魔法世界消滅問題が解決する。

「大切な弟に、いつまでも憂いをおびた表情はさせたくないからね」

問題解決の立役者は、そう笑ってみせたのかなんとか。

そして、そこから更に、8年の時が流れる……………

幼い双子の少年は立派な青年に。

傍らに佇む少女達は美しい女性に……

ネギ・スプリングフィールドとマギ・スプリングフィールド。

2人の物語の、グランドフィナーレの鐘が鳴る。

さいしゅうわ 前編

生まれ変わりって 信じますか……？

カーテンの隙間から射しこむ、まばゆいばかりの朝の光り。私は、「う、ううん……」と小さく唸りながら目を覚ます。きよろきよろと周囲を見渡し……ああ、夢か、と呟いた。

私は、夢を見ていた。

たぶん前世……だろうと思われる夢だ。

夢の中の私は男性で、いつもブラコンな兄の言動や行動に頭を悩ませるけども、そんな兄が大好きな普通の男性だった。もつとも、それは今も性別が変わっただけで大した差はないのかもしれない。

だって、ね？

耳をすませる。

ううん、耳をすませなくても、すうー、すうー、と規則正しく聞こえてくる寝息が2つ。

一人は私の胸の谷間に顔を埋め、こんな寝方じゃ寝苦しいだろうに、彼女はとても幸せそう。

もう一人は私のお腹を枕代わりに安眠している。

胸に顔を埋めているのは、私の双子のお姉ちゃん。

彼女は夢で見たブラコンなお兄ちゃんと同じくらいヤバイ、シスコンなお姉ちゃんである。

お腹を枕代わりにしているのは、大人になったなら私が仕えるのだろう、未来の主。

私の家、神楽坂家は、日の本を2つに分ける大勢力の一つ、関東魔法協会でも有力な血筋である近衛家に仕える家だ。

もう一つの桜咲家と共に、近衛の名を継ぐ者を物理的にも精神的に支え続けた家だったりする。

もともと、私は両家が修める魔法に剣。そのどちらも使えない無才能で生まれた落ちこぼれ。

だから物理的な脅威から彼女を守るなんて到底無理。

周囲からも残念なモノを見る目でいつも見られ……

まあ、そうは言っても気にはしてない。

だって、私は確かに愛されている。

シスコンなお姉ちゃんを始めとする神楽坂家でも、桜咲家の者にも、当然、私のお腹の上で幸せそうに眠る彼女と近衛家にも。

だからじゅうぶん。

夢の中の前世の私が、あれだけ魔法を使えないことで貶されても平然としていたように。

心を強く、そして私は、私に出来ることをするのだ。

と、そんな事を思っていると、トントン、と軽快にドアをノックする音が聞こえた。

私は2人を起こさないように小さな声で、「はい」と返事をする、「失礼します」と部屋に入ってきた。

「はあ、やっぱりここに……」

手で額を押さえ、呆れたように溜息を吐く桜咲家の少女。
彼女は私のお腹で眠る彼女と一緒に、私の大切な幼馴染でもある。

「このちゃんも、あーちゃんもっ！　いい加減におきなさいっ！！」

「マキちゃん、今日はどんな夢を見たん？」

私とせつちゃん……桜咲家の娘が作った朝食を口にしながら、近衛

の次期当主であるこのちゃん……近衛このかが聞いてきた。

一斉に他の2人、お姉ちゃんとせっちゃんも、このちゃんと同じくらい興味津々な表情で私の話をジッと待っている。

私はこの前世っぽい夢を見るたびに、3人にその夢の話をしていたからだ。

その夢の登場人物が、自分達と良く似ているのも、興味を引く一因になっているのだろうし。

だから私は今日も夢の話 시작했다。

たぶん、それは前世の私の大切な転換点のお話。

「あのね？　前世の私のお兄ちゃんが……………」

陽炎立ち上る砂漠の中で、一人の青年が汗をぬぐいながら大きくため息を吐いた。

「はあ……帰りたい……」

そう言いながら、青年は虚ろな瞳で遠くを見つめる。

視線の先は、どこまでも果てなく続く、砂、砂、砂……

だけでも、その一面の砂景色の向こう、ずっと、ずっと先にはとある国がある。

その国の名は、日本。

もともと、本当に、ずっと向こう。

ずっとずっと、ずうっと向こう。

当然、見えるはずもなく。

目に入るのは憎たらしいまでに青い空と、そしてやっぱり砂だけだ。なのに、彼は見るのをやめない。やめられない。

だって、そこには……

「ネギ先生！ いい加減にするですよ？」

「そうですよー。いい加減に諦めてくださいー」

……い。

「何よ、あんた？ 急に黙り込んじゃって。帰りたいのは皆一緒なんだから、ボケボケしてないでさっさと身体動かすっ！」

「砂漠の緑地化……思ってたよりずっときついネ。ネギ坊主がへばるのも仕方ないのではないカ？」

……さい。

「どうしたですか？ 先程から急にブツブツと……」

「のど、かわいたのー？」

「まったく。ほら、ゆっくり、一口ずつ飲むのよ？」

「やっぱりエヴァンジェリン呼んで広域の凍結魔法で氷の壁を作って貰った方が早いかもしれないネ。そしたら砂嵐を防ぎつつ、水事情にも解決の糸口が……」

……るさい。

「」「」「はい？」「」「」

美しい4人の女性の一斉の誰何すいかに、青年は顔を俯かせたまま、ひゅ
うっと大きく息を吸い込んだ。

そして、一気に吐き出す。吐き出す息と共に、気持ちをつつり乗せた言葉を加え。

「つるっせえーっ!!」　僕はマギに会いたんだよマギにっ!　もう僕の中のマギ分が欠乏して生命活動に支障が出てるんだよっ!　ああっマギに会いたいマギにっ!　マギに会ってくんかくんかしたいっ!　マギの温もりマギの匂いマギの感触マギの味……

[illegible]

まああああぎいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい
いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい

「

頭をガシガシ掻き篋り、口から飛び出す言葉は弟の名前。

知らない者が見たらドン引きな光景ではあるが、この場に居た4人の女性達にとっては、いつものことだ。

そんな理解力有りすぎる女性達の連れ青年の名はネギ・スプリングフィールド。

史上唯一、真に【偉大（GREAT）】の称号を持つ真正銘の【立派な魔法使い】である。

しかしてその実態は……

朝起きる時、弟の名を3回恍惚とした表情で叫んでから布団から出る。

マギがニコツとほほ笑んだだけで、ネギの魂が天に昇る。

「マギ・スプリングフィールド？ ああ、あの無能ね？」と言った魔法使いが、雷速でタコ殴りにされた。

必死で逃げても、友人知人家族恋人まとめて全殺し一歩手前に。

「英雄ネギがそんなブラコンなわけがない」と確認しに行った魔法使い100人が、鼻の下を伸ばしてマギを愛でるネギの姿に世を儂んで出家。

マギさえいなければ……、といっせいにマギを襲撃したらネギの広域魔法で全滅。

遠距離はやばいからと接近戦を挑んでも素手でボコボコに。

マギとイチチャついてる（ネギ主観）ネギを邪魔したら、恐ろしい顔で睨みつけられ恐怖のあまり三人が天に召された。

マギと一緒にいるネギを見ただけで英雄ラカンが命乞い。心臓発作を起こす紅き翼のメンバーも。

ブラコンの語源の発祥はたぶんコイツ。

とまあ、犯罪レベルのブラコン。

だが、そんなネギももう二十歳^{はたち}。

流石にこのままじゃあ不味いだろう。

周囲の者達は物理的にマギと距離を離れたほうがいいと、立派な魔法使いとして砂漠の緑地化作業に無理矢行かせたのだが……

3日目で目がうつろ。

10日で情緒不安定。

一ヶ月で中毒症状のような痙攣を起こす。

そして現在三ヶ月目……

マギの声を幻聴。マギの姿を幻視。マギの匂いを……

マギの、マギの、マギのマギのマギマギマギマギ………

たぶん、もうそろそろ死ぬ一步手前。

でも、ネギの傍に居る4人の女達はネギをマギの所に帰そうとは思わない。

正確に言えば、4人の内2人は帰してもいいとは思ってた。

綾瀬夕映と宮崎のどこにとって、ネギがマギの傍に居るのはデフォだから。

とは言え、様々な理由により逃がす訳にはいかないとも思ってる。

そろそろ彼女達もお年頃。

手のひとつやふたつ、いい加減に出してもらいたい。

このままではクリスマス（25才）になっても乙女のままだ。

だから超とアーニャの提案に頷いたのだ。罪悪感で胸がチリチリするものの。

そう、アーニャと超鈴音なのだ。

ただアーニャは、いい加減に弟離れしないと不味いだろうという常識的な考えだ。

超鈴音については……ネギへの嫌がらせ？

自分を死ぬほど働かせているネギが、こうして死にそんな顔をするのを見るのは快感だ。

要は決して勝ち得ない男へのささやかな反抗である。

そんな超が、ネギの様子をみてトドメを刺すべく動き出した。

「ネギ坊主、マギがルームシェアをしたって知ってるか？」

「マギマギマギマギマギ………はぁ？ 何ですそれ？ 聞いてないですよ！？ 誰ですか！ 僕のマギと同居するうらやまけしからんアホはっ！」

「ネギ坊主も良く知ってる相手ネ。それに彼女達と一緒に住むのは初めてではないヨ？」

「……初めてでない？ もしかして、その相手って……！」

「そう、アスナさんと木乃香サン、それにおまけの刹那サンネ」

「……あのボケロボじゃなかったただけマシか？ いや、このかさんと桜咲さんはともかく、アスナさんはあれで結構危なかった覚えが……」

「それにしても大胆だとは思わないか？ あれでもマギは成人した男ネ。自分らが襲われるとか考えなかったのかな？」

「何バカなこと言ってるんですか。マギがそんな真似するわけ……そうだ、そうだよ！ マギはしなくてもあの女共が……！」

両腕で自分の身体を抱きしめるようにしながら、ワナワナと震えだすネギ。

顔色は真っ青で、今にも倒れてしまいそうな程だ。

そんなネギを心配そうにする夕映とのどか。

逆にいい加減に弟離れしなさいよ、と軽く怒り気味なアーニャ。

超は、そんな4人の様子を見ながら、ここで爆弾を落とす決意をした。

心が踊る……

なんせコレを告げれば、ささやかだけでもネギの絶望する様を見ることが出来るのだ！

超は大声で笑い出したくなるのを堪えながら、懷に仕舞い込んでいた封筒を取り出す。

「そうそう、明日菜サンから手紙が来てたヨ」

その言葉に、ネギは眉を吊り上げる。

超が何事かを仕掛けようとしているのが分かったから。

しかもアスナと言えば、たった今、彼の一番大切な存在である弟との同棲（マギ的には同居だったらしい）していることが発覚した女狐である。

まさかマギとアスナの交際宣言か！？

もしもそうだったら……

と、ネギは顔の表情を邪悪に染めた。

アスナさん。貴方はいい人でしたが、マギと交際しようとしたのが悪いんですよ……

マギに男女交際はまだ早い。

今は僕だけを見ていればいいのだ。

だけど、超の言葉はネギの想像の斜め上をいった。

「なんでも赤ちゃんが出来たらしいヨ？」

「」「はあ？」「」

ネギだけじゃない。

夕映にのどか、アーニヤまでもがアングリ大口を開けた。
誰もが、先にネギが思っていたように考えていたからだ。

それがイキナリ妊娠宣言!？
相手はやっぱマギ!？

でもネギは思う。

……いや、違うはずだと。

2人が同棲を始めてからまだ3ヶ月。

ネギがマギの下から離れてからも3ヶ月。

一緒に暮らしていた頃には、そんな兆候はなかった。

それは間違いないのだ。

なんせネギのチェックは凄まじく、もしマギがアスナとそんな関係であつたのなら、ネギが気付かない訳がないのだ。

だとしたら相手は誰!？

と、思考がループする。

でも、ネギの脳は優秀だ。

だから気づいてしまう。

超が勝ち誇った顔するなら……と。

ネギがそう思っていると、超の口がゆっくりと開き始める。
アスナのお腹に宿った子の父親の名前を告げるために。

言うな! 喋るな! やめてくれっ!

ネギはそう叫び出したい気持ちで一杯だったけど、超はそんなネギの様子に快感だ。

「しかも明日菜サンのお腹の中の子供の父親は……」

「「父親は……?」」

身を乗り出す夕映達と、今にも逃げ出したい気持ちで一杯なネギ。超はそんな4人を満足そうに見ながら、

「マギ・スプリングフィールド……ネギ坊主の弟くんネ!」

爆弾を投下した。

一斉に超の持つ手紙に「「きゃあーっ♪」」と実に楽しそうに叫びながら群がる女性3人組と、石化してしまったようにピクリとも動かなくなったネギ。

そして数瞬後……がふっ! と口から大量の血を吐き出し、ネギは砂の大地に崩れ落ちた。

「どうして……どうして、こう……なった……っ!?」

ネギは、口の中に広がる屈辱の血の味に誓った。

すぐにでも日本へと戻り、神楽坂明日菜を……………

抹殺
すると

「さて、みんな。分かってるわよね？」

「はい、分かってるですよ」

「はいー。ネギ先生には悪いとは思いますが……」

「ふはははは、ここまで木乃香サンの思い通りにいくとは。これなら10年前、何としても彼女を誘っておくべきだったネ」

まあ、この4人と、そして黒幕だった彼女がいる限り最悪の事態にはならないだろう。

「ま、これで少しは私達のこと、見てくれるようになるわね」

「だいいいのですが……」

「あつ、私は最後でいいよー?」

いつの時代も、女は強いのだ。

さいしゅうわ 後編

兄は弟を愛している。

大切な大切な家族として、誰よりも。そう、誰よりも。

『いい加減弟離れしなさいっ!』などと言われても、鼻で笑って言った相手を見下し蔑む程に。

弟も兄を愛している。

大切な大切な家族として、誰よりも。そう、誰よりも。

『ブラコンな兄を持って大変だな』などと言われても、『兄離れ出来たのは僕ですよ』そう言って笑うぐらいに。

いや、実際そうなのだ。

いつまでも兄にすぎる弟と、そんな弟が心配でならない兄。
少なくとも弟の方は、自分達の関係をそう思っていた。

……はずなのに。

「なあマギくん。ネギくんおらんのやったら、ウチんトコ遊びにきいへん？　ウチらな、むっちゃ広いところに引っ越したんや。それにアスナもおるし、刹那さんもおるし……」

普段なら絶対に断る系のお誘いである。

女だらけの中で男が一人とか、軽い拷問だ。
マジで勘弁して欲しい。

奥手なマギは、心底そう思った。

しかし、マギはそのお誘いに乗ってしまった。

一緒に暮らしていたネギがいなくなり、一人ぼっちが寂しかったのもある。

それに彼女の住む家……と言うか、屋敷に興味もあったし、木乃香達とは幼少の頃に同居した経験もあった。

簡単に言うならば、奥手なマジでも気安いのだ。

……その考えが、兄に絶望をもたらすとも知らず。

弟が遊びに行くと、広いリビングを埋め尽くすお酒の瓶。

弟は大学2年生の20才。

法律大丈夫ではあるけれど、酒精を口にすることは滅多にない。いや、それでもなくてもこの量はやばい。冷や汗が滲み出る。

「なんやマジくん？　ウチらの酌で酒は飲めへんとも言っくん？」

威圧感溢れる恐ろしい表情に負け、その日、弟は酔い潰された。

翌朝、弟が目を覚ますと、そこは見知らぬ部屋。

古い言い方をするなら、知らない天井ってやつだ。

そして、隣には健やかな寝息を立てて眠る女性がひとり。ベッドのシーツには乙女が散らされた赤い印と情事の跡。

弟は頭を抱えながらこう言ったという。

「買……？」

そう、買だったのだ！

彼女は、もう何一つとして失うつもりは無かった。

何も知らないまま、ただ失い、嘆くだけだった過去の自分。

そんな自分ではなく、積極的に動き、知り、全てを手放しはしない。

そう、決めたのだ。

「木乃香さま、これなんかどうでしょう？」

「うーん、アスナはスタイルええからなく。もうちょい、胸元が開いたの搜してみい」

「はい、かしこまりました」

柔らかい微笑を浮かべ、恭しく礼をする彼女を見て、その気持ちを
もっと強める。

だって、彼女は大切な、初めてのお友達だった。『だった』のに……
なのに、もう、お友達に戻れない……

木乃香が『裏』の世界を知ったのは、大学を卒業した時である。
自分が普通の学生生活を謳歌していた間、その初めての友人は木乃
香の『普通』を守るためだけに生きていた。

中学で再会してからの10年……そう！ 10年間もっ！！
自分の護衛として、光の当たらない、薄暗い場所から。

ずっと、ずうっと……

守ってくれていた感謝よりも、申し訳なさで心に痛い。

これ以上の激痛はないと思えるくらいだ。

人目も憚らず、のたうちわまり泣き叫びたくなる。

木乃香は隣でパンフレットを楽しそうに見ている、その初めての友人に気取られぬよう、憂いを込めた表情でゆっくりと首を横に振った。

もう、あの頃には戻れない。

何も知らず、ただ大切なお友達同士だった頃には。

彼女との間には、はつきりとした主従関係が出来てしまっている。

——せっちゃん

このちゃん——

そう呼び合っていた仲が、

——刹那さん

木乃香さま——

今ではどこことなく距離を置いたような呼び方だ。

……それでも、以前に比べればずっとマシだと、木乃香は思う。
目を合わせることもなく、万が一に合ったとしても、どちらともな
く視線をずらす。

そんな関係に比べれば、今の関係は万倍マシだ。

だから、もう、手放しはしない。

かつての友人である刹那だけでなく、今の大切な友人であるアスナ
も、絶対に手放しはしない。

「純白は懂れますが、この薄い桜色なんかも良いと思いませんか？」

口元を笑みの形で綻ばせる刹那に、木乃香は「どれどれ」なんて少
し楽しげに彼女の見えるパンフレットを覗きこんだ。

2人の間には、確かに主従としての関係があった。

刹那から、決して消えない丁寧な言葉も。

木乃香から、決して消えない罪悪感も。

それは2人の間にある溝。

10年という長い間に出来てしまった、決して埋めることのできな
いモノである。

それでも！

2人は今の関係が嬉しかった……
互いに互いを大切に想う、彼女達は。

「そうやな……うん、それにしよか？」

「はい。では、これを注文しときますね」

だからこそ木乃香は、今の状況に満足できない。

もっと！もっとや！もっともっともっと……

大切な人は、決して失わないように大切に囲い込み、それを邪魔する輩は排除する。

今、彼女の脳裏にある邪魔者は………

ネギ・スプリングフィールド。

彼女にとって、彼もまた大切な友人の一人ではあるけれど。

ごめんなあネギくん。アスナがな、マギくんのことを大切に想ってるんや。

だから、マギくんはウチらが貰うな……？

うつそりと、そう、凄惨に。

でも凄まじく妖艶に嗤う木乃香。

そんな彼女を頼もしそうに見守る刹那もまた、彼女と、彼女の友人の為に、彼を決して逃がさぬ桃色の檻に放り込む手筈を着々と進めていくのだった。

「どうして……こう、なった……」

両手で頭を抱えるようにして、苦い、苦い、とても苦い呟き。

正直、意味が分からない。

最早逃げ出せない。

いや、逃げ出す訳にはいかない。

キリキリと胃が痛む。

自分の隣には、嬉しそうに微笑む美女がいるというのに。
大学の友人が見たら、血の涙を流して羨むだろう状況なのに。
まるで幸せは、遠い彼岸の先にあるよう。

——でも。

物心ついた時、両親はいなかった。
見かけだけは優しい隣人。
でも、どこか距離を置いた人々。
頼れるのは兄だけ。

そんな生活の中、憧れた。

憧れた。

憧れた。

暖かい家族の情景——

「どうかした？」

「なんでもないよ」

敬語を使わなくなった。
だって、家族だから。家族に、なるのだから。

「ただ、ちょっと……」

「ちょっと、何よ？」

「記憶にない一夜で親になるってさ……」

「ああ、童貞くんだったわけ？」

意地悪く笑う。
でも、嬉しそうだし、楽しそう。

「アスナさんだって処女だったじゃん」

「アスナ！　でしょっ！」

不満そうに唇を尖らせる。

『さん』付けしたのがそんなに気に食わないのか？

まったく、どっちが年下なんだか……

「……アスナだって処女だったでしょうが」

言い直す。それだけで彼女のふくれた頬は緩んだ。

彼女は相変わらず楽しそうな雰囲気を纏わせ、下から覗き込むように上目遣いで見上げてくる。

頬は赤いか？

んー、と少しだけ唸る。

そして、シャツの胸元を、クイツと引っ張り。

見える柔らかそうな双丘の谷間。

ギリギリ見えない頂上の突起物が、男の何かを激しく揺さぶる。

「じゃさ、する？」

「……大丈夫なの？」

「まあね。妊娠してるって言っても、まだ2ヶ月だし？ たぶん大丈夫なんじゃない？」

興味ありません。

普段からそんな顔をしてるくせに。
やっぱアンタも男だったんだ。

身体に押し掛かる重み。

衣擦れの音。

自分の欲望でもある。

コイツの欲望でもあるだろう。

いつの日からか、コイツを誰にも盗られたくないと思った。

ゆっくりゆっくり……

十年かけて重ねた想いである。

何か特別なドラマがあったわけでない。

カッコいいヒーローみたいなヤツでもない。

こちらも、ヒロインとしては失格だろう。

ただ平凡に、平凡に……

でも。

コイツといれば、アドベンチャーはないけど、それでも平凡な幸せを手にできる。

あの人との、約束を守れる。

そう思った。

そう、想った。

恋……はなかった。

好き……という気持ちも弱い気がする。

だけど、愛。

そう、私は、神楽坂明日菜は、マギを、愛してる。

だから誰にも渡さない。

茶々丸さんにも、コイツが妹のように可愛がっている少女たちにも……コイツが一番大切に思っている、コイツの兄にも。

貫かれる苦痛に声を上げそうになるのを喉もとで堪えながら、自分は汚い大人になってたんだと、先程の考えを嘲笑う。

そう、大人。

学生ではない。

援助はどうに受けてなく、自分の稼ぎだけで生きている。

立派……かどうかは分からないけど、確かに大人だといってもいい。

これからの出産を考えると、ちょっとアレだけど。

主に資金的な意味で。

こればかりは、腕の中のコイツは役に立たない。

コイツはまだ学生。

学校を辞めて働けば？

まさか。しっかり大学卒業して、好きな職に就いたらいい。

だから、仕方ない。

住む場所は、このままこのかの屋敷。

女だけしか住んでない屋敷に、夫婦で住むのもどうかと思うけど。それと資金の援助もして貰わなきゃ。

若かりし頃。それこそ学生の頃だったら、絶対に容認できない考えだ。

この辺りも、汚い大人である証拠。

まあ、このか自身が、そうさせようと動いた結果でもあるのだし。

……それにしても、痛い。

2度目なのに、全然痛い。

傷口をナイフで抉られるように痛い。

気を抜いたら、泣いてしまえそう。

愛し合うだけでこんなに痛いなら、子供産む時はどんだけっ！？
安定期が来たら、毎日のようにした方がいいかもね。

その方が道も出来て、すんなり出産できるかも。

苦痛の顔を彼には見せず、ただ幸せそうに微笑む彼女は、確かに弟を『大人』にしたのだろう。

ネギにとって、それは許されざること。

一人にはなりたくなかった。

おいてけぼりは嫌だった。

自分を捨て、たったひとり、大人になってしまったマギ。

なんでっ！

どうしてっ！！

僕たちはいつも一緒だろうっ！？

そう喚き散らしてみても、もう弟は振り返ることはなく。

兄ばなれが行われ、そして弟ばなれも強制的に行われた。

ウェディングドレスを着た雌豚を、タキシードを着た愛しいナニモノにも代えがたい弟が抱きしめた。

弟と、2人で一つだった僕でさえも見たことのない顔で、弟は雌豚にキスをする。

ミサイルランチャー片手に暴れようとする駄ロボを行動不能にしながら、頬を伝う熱い何かは涙なのだろう。

きっと、この胸に溜まる黒い澱みは、あの雌豚への恨みごとだ。

愛する家族を奪われて、ふざけんな、死にやがれ、と糾弾したい。

でも、それはできない。

ネギはマギを愛している。

マギも、ネギを愛してくれているはず。

ただ家族でなくなる。それだけ。

この胸に宿る想いの全ては、ネギの我儘にすぎず。それをネギも理解してしまっていたから……

だけど、

死ね。

多くの怨嗟を飲み込んで。

死ね。

今日から僕は、もうマギのお兄ちゃんでは……

「兄さんっ！」

ああ、僕は今でも君の兄さんでいいの？

「今まで、本当にありがとう」

違う。これで終わりか……

冷たい何かがスウッと胸を通り過ぎた。

「兄さんがいなきゃ、僕は生きていけなかった」

それは、僕こそ言いたい。

君がいなきゃ、僕は君の記録にあった僕になっていた。

周囲を巻き込み、ただひたすらに行方不明の父だけを求める歪な英^{おろ}雄^{かも}。
言動不一致に世界の理^{ことわり}を荒らし、敵対する者を、いやそれどころか、

味方すら貶めていく生き方。

……反吐がでる。

「だから、ありがとうございましたっ」

ああ、これで、終わりか……

「これからもよろしくっ！」

「……………?」

何を言われたのか分からない。

絶望の淵で、いきなり救世主が現れたらこんな表情になるのだろうか？

私はネギの頭をパシンと叩く。

思った以上に好い音が出て、叩いた本人が言うのもなんだが、少し驚いた。

それでも茫然としているネギを、無理矢理こちらに振り向かせ。

「私も。ヨ・ロ・シ・ク・ね？」

「……はい？」

絶望に濁っていた瞳が、徐々に生氣を取り戻していく。

ネギのことだ。

もうコイツとの縁が終わったとか、もう僕はお兄ちゃんではないとか、家族ではなくなって僕は一人なんだとか、的外れにも程があることを考えていたんだろう。

まあ、コイツの面倒をみるのは、これからは私なんだけどね。

「えっと……にいさん？」

様子がおかしい兄さんに、訝しげに声をかける。

目をパチクリと何度もまばたき。

何がショックだったのか、顔には血の気がなく、色が真っ白。

でも、ちょっと乱暴にアスナに声を掛けられてからは、徐々に赤みを取り戻していく。

結婚、反対だったんだろうか？

確かに出来ちゃった婚は恥ずかしい。

身内としてはどうよ？　とでも思っているのかも。

そう思っていると……

「僕は、これから先も、マギの兄で、家族だと思ってもいいの？」

おずおず、子供みたいに顔色を覗いながら、僕にすがるような視線で、態度で。

ガッンッ！　とマギは殴られた気がした。

ネギ・スプリングフィールド。

立派な魔法使い。偉大の2つ名を持つ、真の英雄。

彼はなるべくして英雄になったが、なろうとして英雄になったわけではない。

マギの記録にあったネギ・スプリングフィールドとは違い、立派な魔法使いなんて物に興味はなかった。

父も母もいなかった。

親代わりもいなかった。

気がついた時には、親と呼んでイイものはいなかった。

3つ、4つ、5つ……幼き……と言うより更に儚い幼少期を孤独に過ごす日々。

いや、孤独ではなかった。

幸いネギには弟がいた。

もしもその弟がいなければ、寂しくてどうにかなってしまったかもしれない。

父に会いたい。母が恋しい。

そう思う以上の想いで弟に接した。

両親など元々ないモノだと、大切な弟を心から必要とした。

ネギにとって、弟のマギこそが全て。

マギにとって、兄のネギこそが全て。

そう信じていたからこそ、ネギは英雄になった。

ただ、マギを守る為に……

兄は弟を愛している。

大切な大切な家族として、誰よりも。そう、誰よりも。

『いい加減弟離れしなさいっ！』などと言われても、鼻で笑って言った相手を見下し蔑む程に。

弟も兄を愛している。

大切な大切な家族として、誰よりも。そう、誰よりも。

『ブラコンな兄を持って大変だな』などと言われても、『兄離れ出来ないのは僕ですよ』そう言って笑うぐらいに。

ただ、これだけが真実。

狭い世界と言うなかれ。

彼ら兄弟をこうしたのは、周囲の腐った大人たち。
自分達こそが正しいと信じている大人たち。

大人はあてにならない。

だから互いに支え合って生きてきた。

兄には弟しかなく。

弟にも兄しかない。

そう思っていた。

そう思わないと生きていけなかった。

なのに、弟はひとり、歩きだしてしまった。

兄を置いて。

たったひとりで。

ああ、なんてバカな……

——僕は、これから先も、マギの兄で、家族だと思っていいの？

そんなの決まってる！

でも、言葉にしなきゃ分からない。

例えば、2人でひとつの存在だった僕たちだって……

そうだ。

僕は目先の幸福に浮かれて、兄さんを忘れてしまっていたのだ。

と、その時。パシンと頭を叩かれる。

——じゃあ、どうすればいいか、分かるでしょ？

結婚は、家族を作る儀式だ。
家族を、失う儀式ではない。

だから、うん、分かってる。僕は……

どこかオドオドしている兄さん。
兄さんのこんな姿は初めてだ。

たぶん……

きつと……

これが兄さんの本当の姿なんだろう。

僕は、兄さんむかってに手を伸ばす。

ビクンと小さく身体を震わせる兄さんは、恐怖で顔を強張らせた。

「ねえ兄さん。僕は……」

伸ばされた手に、兄の手が重なった。

「そんな、夢を見ました」

お姉ちゃんが大人になった私の奥さんで、このちゃんとせつちゃん
は、何でか一緒に暮らす家族だった。

そして、今も私たちは家族。

例え死んで生まれ変わっても、私たちはずっといっしょ。

だとしたら、もしかして……

「この広い世界のどこかで、マキちゃんの前世のお兄さんが、マキ
ちゃんを捜しとるかもしれないなあ」

私の考えを、そのまま口にしたこのちゃん。

でも、お姉ちゃんは、顔色を変えて私に抱きついた。

「ダメっ！ダメよマキっ！！ そんなどこの馬の骨かからん奴、
お姉ちゃんは許さないわよ！」

「えっと、どういう意味？」

「あのねマキちゃん。あーちゃんは心配してるんです。英雄『ネギ・スプリングフィールド』の生まれ変わりがいるとしたら、マキちゃんをお嫁さんにしちゃうんじゃないかって」

「そやなあ。あーちゃんは前世で双子でブラコンな兄から弟を奪った方やから、今度は双子でシスコンの姉として妹を奪われるかもしれないなあ」

くすくす笑いながら楽しそうにそういうせつちゃんこのちゃんは、怒り狂ったお姉ちゃんに制裁されて……

私はいつもの幸福の光景に、頬を緩める。

学校に行けば、茶々丸先生に交際を迫られ。

クラスメイトで200年以上も中学生やってやさぐれているエヴァちゃんを慰め。

お姉ちゃんが私に交際を迫る人達を千切っては投げ、千切っては投げ……

そして来る、運命。

おにいちゃんと呼ばれたいネギと

前世は血のつながった肉親だけど

今は他人だから合法的に結婚できそうなおとうとだった女の子

始まりま

す☆

さいしゅうわ 後編（後書き）

あとがき

これで終わりです。

残りは、そう。

書ききれなかった『人物ストーリー』のプロット部分。

それを晒して本当の終わり。

まあ、メインやサブで出てきた登場人物のその後について書かれて
いると思って下さい。

この作品。元は『どうしてこうなった!？』というタイトルで理想
郷にて投稿させて頂いていた話です。

作品の一つの決めごととして、『どうしてこうなった』を一話中に
必ず一回は言わせる。

そんな決まりがありました。

そして、話のコンセプトとしては、よくあるアレ。

もしもネギに兄弟か姉妹がいたのなら？です。

もしも兄弟や姉妹がいるのなら、原作のような子にはならないでし
ようと。

大抵の場合は、原作まんま。

もしくはもつと酷い性格になったネギが、双子に蹂躪されまくる話
が主流です。

というか、それ以外は2〜3しか作者は知りません。

しかし、これを書き始めた当初は、その2〜3すらなく。

だったら俺が書いてみようと思ったのが切っ掛けだったりします。

まあ、書き始めてから間がありすぎて、今では陳腐なものになっ
ちやいましたけどねw

さて、長々と書きましたが、ここまでお付き合いくださり、ありがとうございました。

作者の他作品の方もお読み下されば幸いです。

じゃ☆

おまけ

ネギ・スプリングフィールド

原作主人公。

弟のいない生活が寂しく、本編終了後、アーニヤ、夕映、のどか、超鈴音との間に子供をもうけた。

他にも何人もの女性達（主に3－A生徒）に手を出し、『サウザンドマスター（千の女と子を成した漢）』の2つ名を付けられる。

奇しくも？その2つ名は、父ナギ・スプリングフィールドと表面上は同じであった。

沢山の女性と交際し、沢山の子供や孫に囲まれる一生ではあったが、それでも彼の中で一番は弟マギである。

その証拠に、彼の死因はショック死。

マギが脳卒中で倒れたと聞いて、急ぎ病院に駆け付けたネギは、そこですでに亡くなっていたマギと対面。

ショックのあまり心臓が停止。この世を去った。

享年62歳。

妻たちや子供たちはこぞってネギの死因についてこう言った。

ネギ（お父さん）だから仕方ない。

妻たち、そして子供たちも孫達も、自分達よりもネギがマギを愛し

ていることを知っていたのだ。

だから、仕方ない。そう言って笑った。

ちなみに転生先は、アーニャとの間に出来た子供の直系の子孫。

ネーキッド・スプリングフィールド。

18才にしてマホラに教師として赴任。

マキと出会って以降は、ロリコンや変態と蔑まれたが、彼女の為だけに生きた。

マギ・スプリングフィールド

転生者。

アスナと結婚後、神楽坂の戸籍に入って神楽坂真木となり、近衛家の居候となる。

大学卒業後は、転生者としての日本語能力、今生の英国人としての英語能力を活かし、翻訳家として活動した。

アスナとの間に5人の子をもうけ、まあまあ平凡に生きる。

ただ、そのうちの一人が戦闘者として養育を受け、以降、この血筋が近衛の守護を担うことになったが。

マギは自分の子供が裏の世界に入ったことを知ることもなく、そのまま一般人として一生を終えた。

死因は脳卒中。

普段から木乃香の酒盛りに付き合わされたせいと思われる。

再びの転生はTS。

神楽坂真来。

前世の妻と双子の姉妹として生を受けた。

前世と同じく裏の力を一切持ち合わせず、無能者として蔑まされる。しかし双子の姉や幼馴染の愛情を受けて健やかに成長。

マホラ学園都市に入って以降は、マギの生まれ変わりだと一目で見抜いた茶々丸に貞操を狙われたり、赴任してきたネーキッドに交際迫られたりと、中々に賑やかな一生を送る。

エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル

初期設定ではマギの相手役だったのに、どうしてこうなった（笑）彼女の封印は、200年たった転生後の話でも解かれておらず、マホラの立派な魔法使いを目指す者達からさえ、憐みの眼で見られている。

みんな何とかしてあげたいと思ってはいるが、英雄ナギ・スプリングフィールドの呪いは誰にも解けない。

解ける可能性のあったネギは、すっかり彼女の存在自体を忘れ、そのまま死去しており、すでにエヴァも諦めの境地にある。

彼女の封印が解ける日はくるのだろうか？

ちなみにネーキッドの血と魔力。もしくは神楽坂亜栖菜の力があれば解ける可能性は高い。

絡繰茶々丸

マギ命。

日々をアスナとのバトルに費やす日々だったが、その思いが報われることはついになかった。

マギの死後はショックで20年ほど機能停止。

目覚めた後も、マギを想って10年ほどはぼくとすごす。後に心機一転。教師となり、マホラで教鞭を振るった。

真面目で優しく、美人な先生として評判が高かったが、マキが生まれた後はその評判が地に落ちる。

一目で神楽坂真来がマギの転生だと見抜いた辺り、彼女の想いは本物であった証拠ではあるが、本当にちょっとした頃から性的な意味で迫ったせいで、ロリペドでレズの淫行教師と呼ばれるように。

それでも首にならない辺りがマホラだろう。

ちなみにマキと幸せになる為に開発した、股間に装着可能なアタツチメントを使えば、マキを妊娠させることも可能らしい。

ガンドルフイーニと式集院の娘たち。

初期設定ではサブヒロインだった。
ガンドルフィーニの娘は、マギが結婚後、初恋の人であるネギと。
式集院の娘の初恋がマギであったが、彼が結婚する時は、心から祝福。
そしてやっぱりネギに落とされた。

神楽坂明日菜

気づいたらヒロイン。
大学卒業後、体育教師としてマホラに就職。
日々たまるストレスを、マギとの僅かな邂逅で解消していた。
結婚後は体育教師を辞めて家に入る。
収入は近衛邸の家事一般を請け負う事で木乃香から出ていた。
その収入でマギや子供たちを養い、マギが大学卒業後、翻訳家として成功するまでは彼女が一家の大黒柱であった。
子供は全部で5人。
長男・長女・次女・次男・三男である。
マギが脳卒中で倒れて3年後、彼女は死病に犯されベッドで寝たきりに。
そして死の寸前に封印されていた記憶を取り戻した。
約束、守れたよ。ガトーさん。マギ、今いくね。
それが最期のことばであった。

転生後はマギの転生である真来の双子のお姉さん。
度を越したシスコンとして名をはせる。

神楽坂亜栖菜。

戦闘者としての才能も素晴らしく高く、究極技法である咸卦法の使い手にして、完全魔法無効化能力まで持つ神楽坂の希代の跡取り娘。日々、淫行教師茶々丸を排除したり、ロリコン教師ネーキッドを排除したりとする内に、教師という教師が大嫌いになった。

いつか真来と結婚できるようになるために、総理大臣になって法改正するのが将来の夢。

近衛木乃香&桜咲刹那

本文で大体語った通り。

たぶん、ネギとの間に子供をもうけた。

マギはアスナ一筋。

転生後はせっちゃん、あーちゃん、まきちゃんと親友になり、本当に幸福な日々を送る。

近衛此乃華、桜咲瀬津那。

綾瀬夕映&宮崎のどか&アンナ・ユーリエウナ・ココロウア&超鈴音

一般に言われているネギの妻たちは、彼女達の事を指す。

特にアンナ……アーニャの子供たちはスプリングフィールドの名を継承し、後のネーキッドの祖先である。

ちなみに超鈴音の子孫が、超鈴音であった。

ついでに言えば、超以外は転生してない。

超は転生前の記憶が残っており、なんとなくマホウを調べてみたら、明らかにネギっぽい奴と、マジっぽいのがいるのに気づく。

以降、絶対に近づかないと心に誓った。

彼女は異性としてネギを愛していた訳でも何でもなく、なんとなく関係持ったらできちゃっただけだったから……

今生は難しいことを考えないで、普通の恋愛して結婚しようと思ってる。

これにて終幕

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2869o/>

おにいちゃんなネギと、転生者でおとうとなボク

2011年5月4日11時28分発行